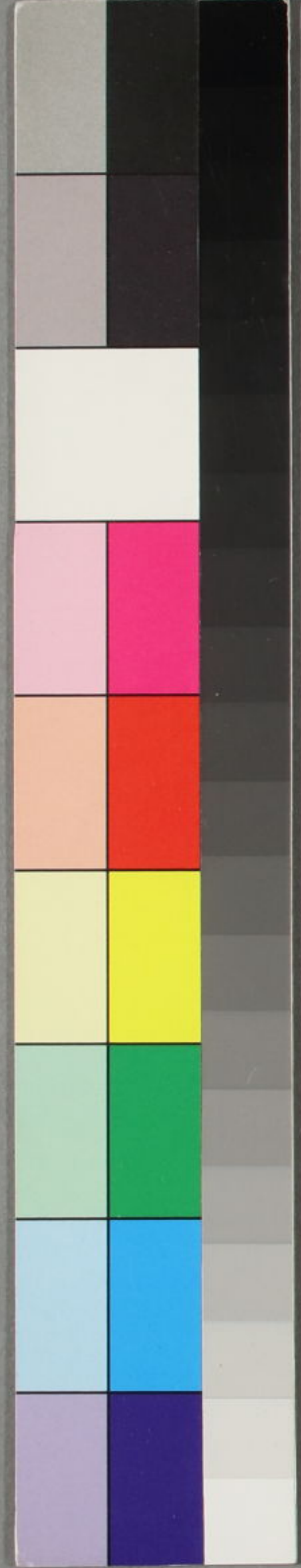


閑田次筆

三

1 曾
22
3



門 1 曹 5
號 22
卷 3



岡田冲平巻之三



○性靈集弘法大師詩偈集常にシヤウレウ集としと其



宗徒の素讀するをたセイレイと漢音にふむ是佛書
にいつたゆきしとぞこれもが實をわらへるえ
るをふよとて客家の学力あるは師の法をり

○同一法は性靈集を編むる真濟僧ののとを元亨釋書
のよ足なりまうはよ此真濟僧ののとを元亨釋書
に深殿のたよ恋慕して鼻中の魅とをわたりし
ととをせりこれ何よあつるもや不獲免まは
と人のいふやうなる陰真仙意の山門梅園といふ
博覧の人乃性靈集を記する便衆おこつよふふ衣

の説述に佛志をいふべきはなりき書ののむのふも
 外地に授けし釋書もこれに基をうづるやいかり
 ぞ平なりする九元亨釋書より無智の事すあま
 るべし爰の天帝に祈請して雷に成る
 あつた後小角の葛城の橋と言ふその社にあつ
 らしむるもありやまゆふまをさしめ伝
 説の誤のまに記せしなり九元亨の書のみ
 いはれし穿鑿を及ぶれり彼の他家の所を
 はふても違ふこと多しや或僧の語せし
 又此釋書より不穩助後まゝと明王云才及
 盧安堂といふ儒者難したるも皇明張美祿とい
 書ふありしなり

○古今集の或は又河く大師の弟子真雅僧
 正も業平朝臣の心童なり其美兒にめで
 こといふことありのいふことあり
 といふ説あり可尋と記せりこれ古今集そ
 うすくいふこと何れもいふことありて
 或はこの説をききん可尋といふて
 かなふもいふことありて此後をいふたか
 やこの説はいふことあり

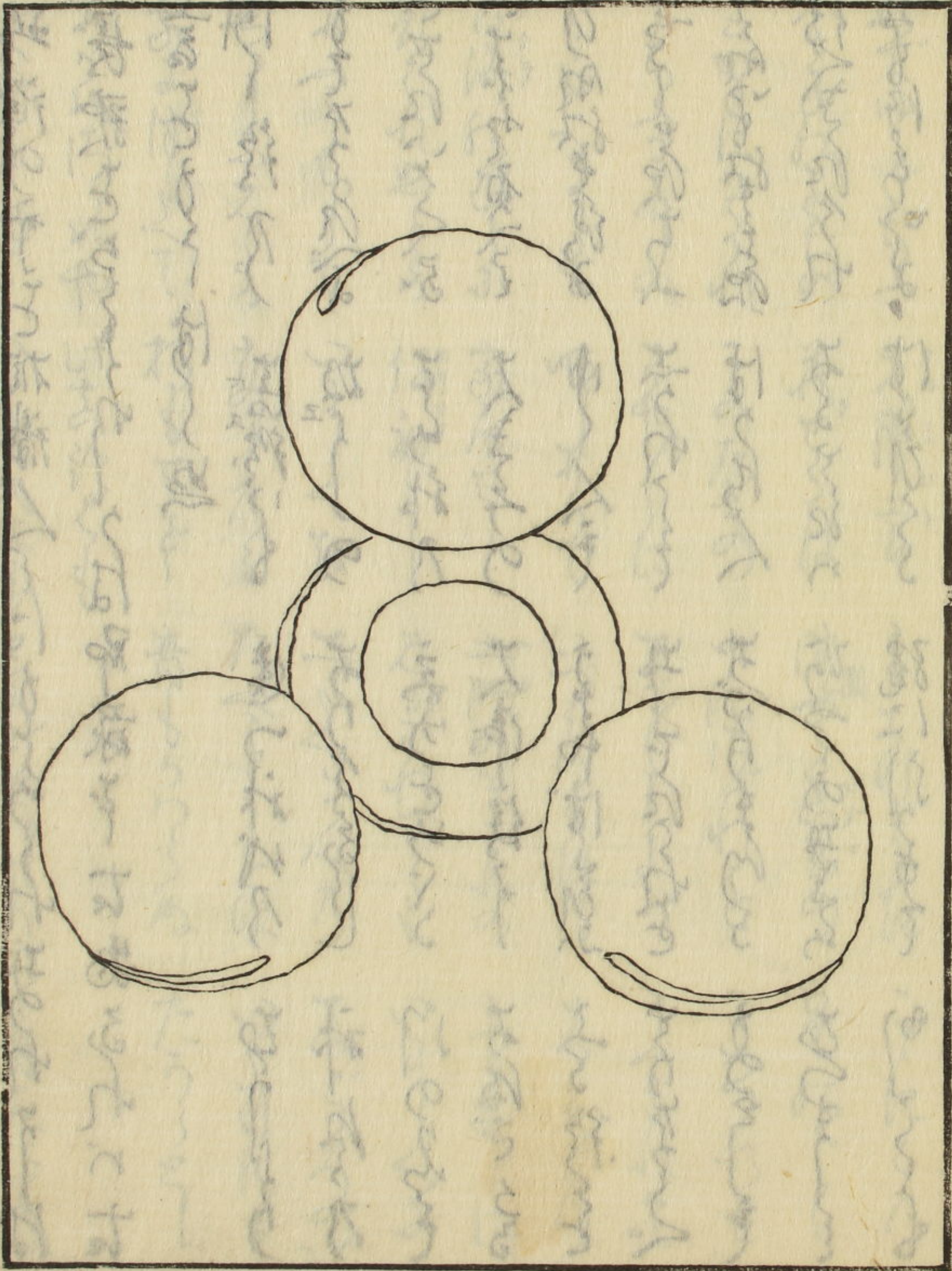
○及く海棠賣茶のまじりし折骨と
 流るるその茶碗と骨を粉砕して
 流るるその茶碗と骨を粉砕して
 海棠もくく病して身もろりぬる

○字義にひしとあひする訓もあつりしるる
 よのそまのしたるは饑字の説に去をさるるに
 以酒食とてしるる経と詩經邶風の程の
 道祖神とすつりて後其訓を飲とすもこも
 並にたやうと申字さうやのさるるに
 のさるるに食ふ從ふ字と説と訓とに
 大に異なり馬の鼻とけとけ旅に人乃馬の
 鼻のこもいふとけとけとけとけとけとけ
 馬の鼻とけとけとけとけとけとけとけ
 といふもよれ旅とてさるるに食とていふ
 も酒食とていふも用ゐるまわりの變字なり

輓歌同はこつりて挽と挽とて後同横
 が故事より出づるをて哀傷の詩なり
 前集も是と輓と題と是の類とふはさる
 り

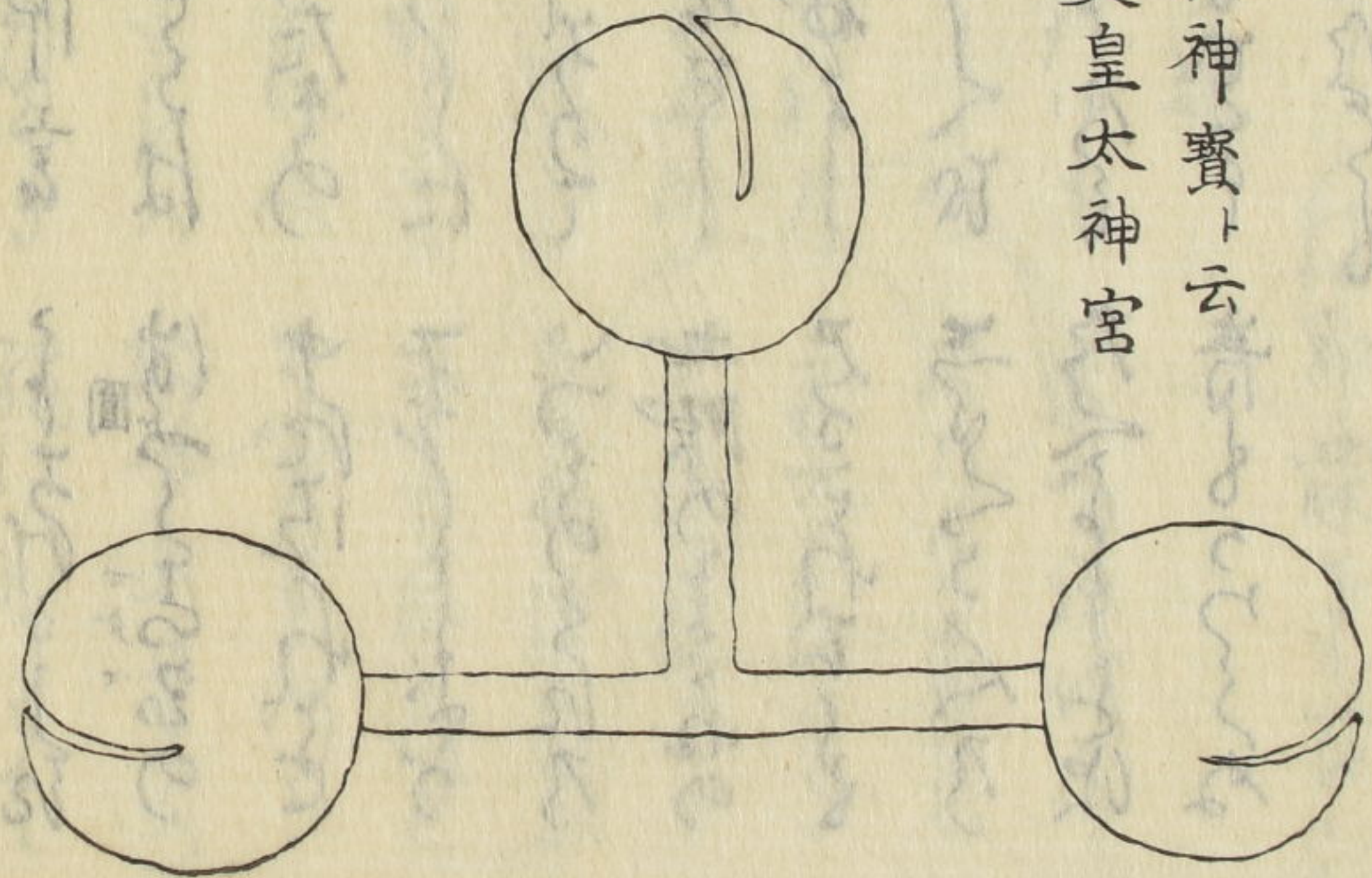
○音義に勝し元來獨字の樂なり
 かつりて音義に勝し元來獨字の樂なり
 も他人の邊東のころをらんし史記鄭
 吳楚七國兵起時長安中列侯封君行從軍旅
 齋貸子錢々々家以為侯邑國在關東關東成
 敗未決莫敢與唯無鹽氏出捐千金貸其息
 之索隱初齋貸と註し云齋音子替反
 貸候也音吐得反トクシ後千金下の貸と註す

程の^一部^一を^一ま^一つ^一た^一ら^一れ^一ど^一大^一う^一と^一そ^一形^一も^一酒^一罎^一に^一也^一
 ○此井高^一と^一金子^一氏^一の^一古^一器^一物^一古^一書^一画^一の^一数^一引^一録^一
 數^一物^一と^一あ^一ら^一ふ^一と^一集^一めて^一并^一せ^一し^一所^一其^一中^一ふ^一和^一泉^一園^一
 大^一鳥^一部^一百^一濟^一村^一に^一り^一堀^一を^一せ^一し^一や^一り^一に^一古^一珍^一あり^一
 此^一の^一中^一に^一土^一師^一氏^一祖^一野^一見^一宿^一禰^一の^一宅^一地^一を^一東^一に^一
 及^一正^一天^一皇^一の^一陵^一西^一に^一履^一仲^一天^一皇^一の^一陵^一あり^一に^一徳^一天^一
 皇^一の^一大^一仙^一陵^一も^一近^一し^一宿^一禰^一の^一社^一も^一その^一近^一に^一あり^一
 去^一り^一の^一其^一代^一の^一物^一は^一べ^一し^一と^一り^一力^一劔^一數^一も^一に^一り^一し^一
 う^一で^一ま^一は^一錆^一腐^一と^一し^一大^一換^一と^一唯^一此^一珍^一の^一を^一今^一も^一存^一す^一
 と^一が^一昂^一圖^一と^一す^一事^一



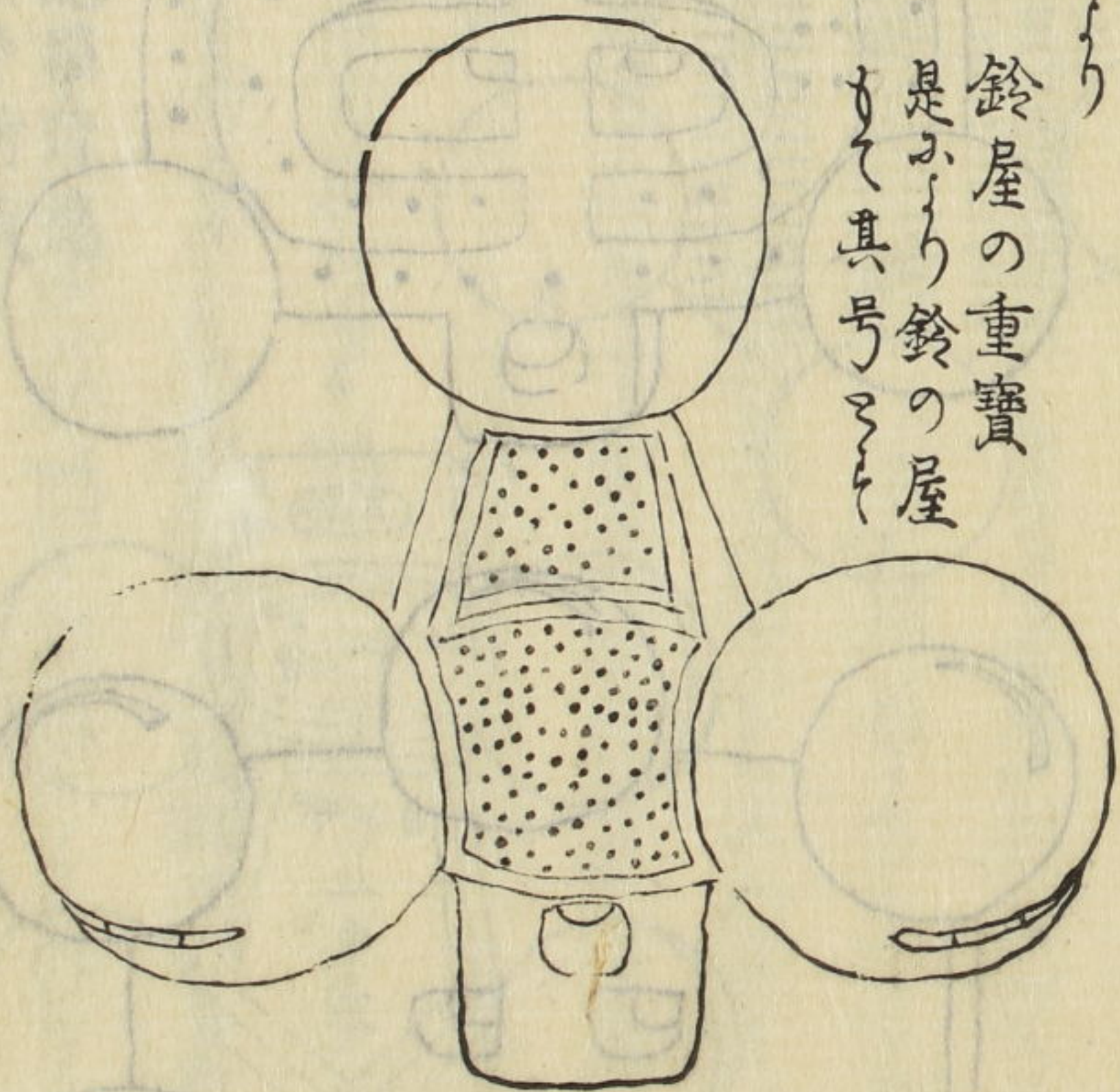
比禮鈴

神武天皇十種神寶ト云
浪花座摩豐受皇太神宮
神寶



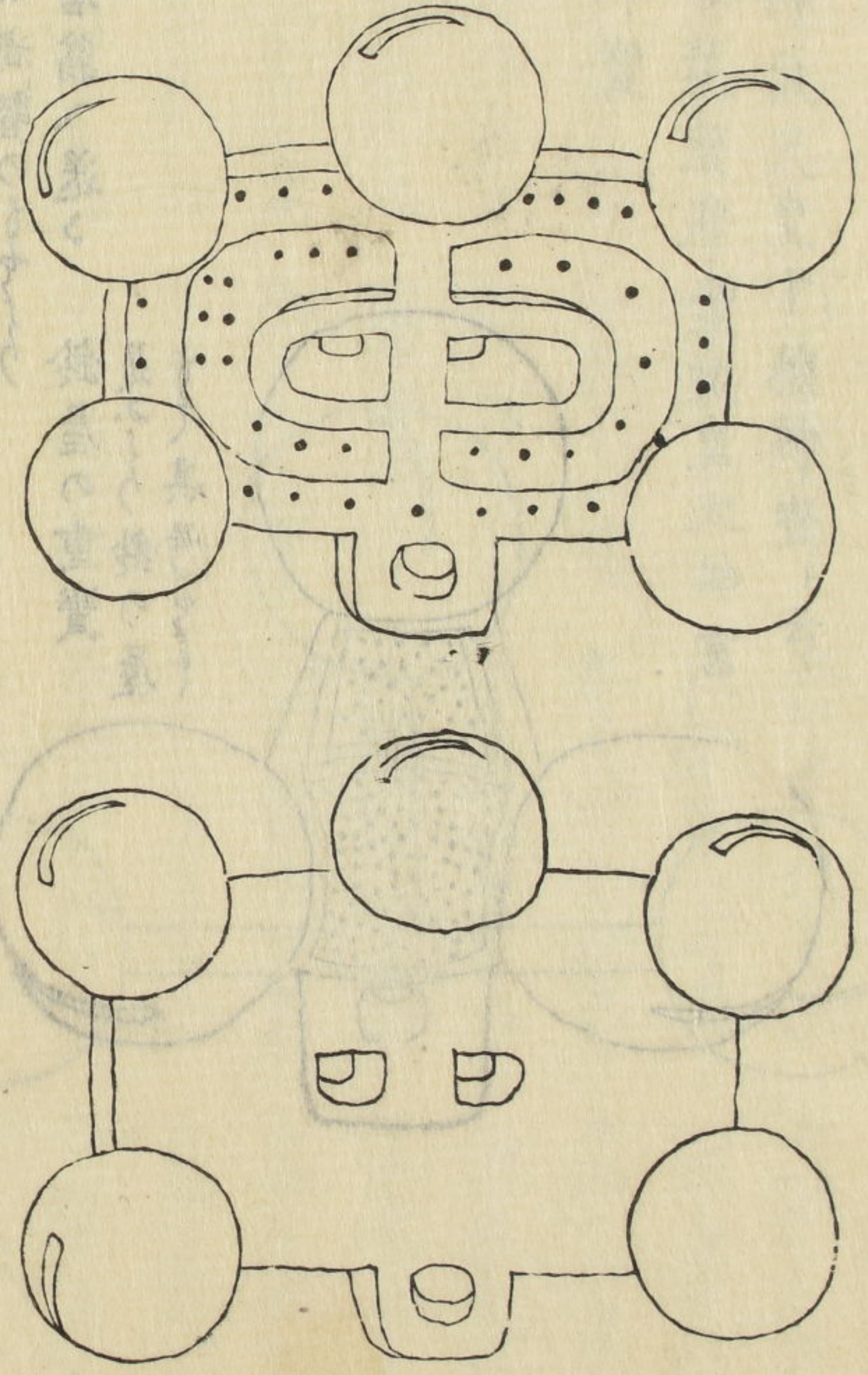
五十鈴宮の境内山中より
掘出安永の末蓬萊大夫荒
木田尚賢のものなり
本居翁へ送る

鈴屋の重寶
是より鈴の屋
もて其号なり



古鈴在所不知圖傳之

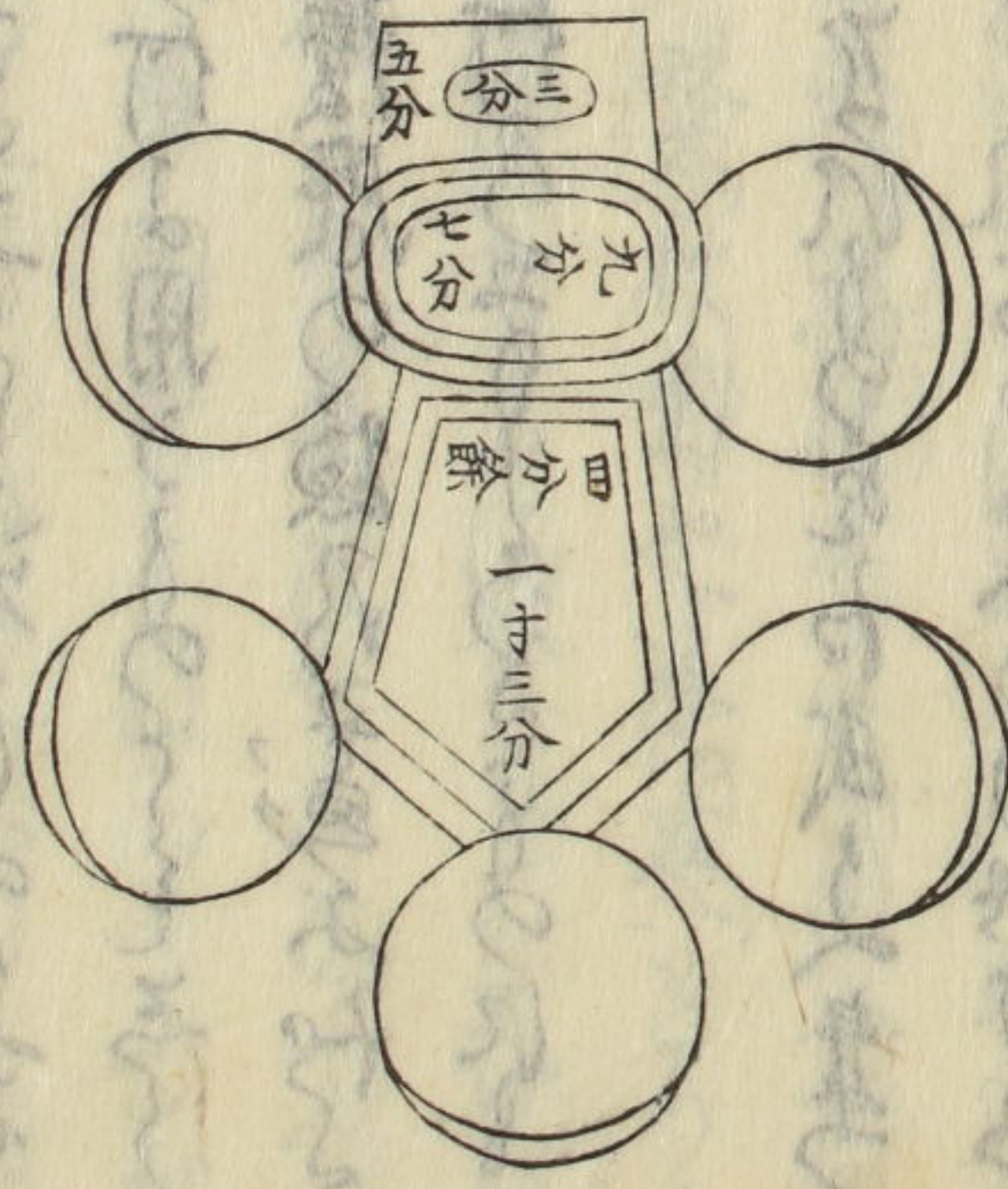
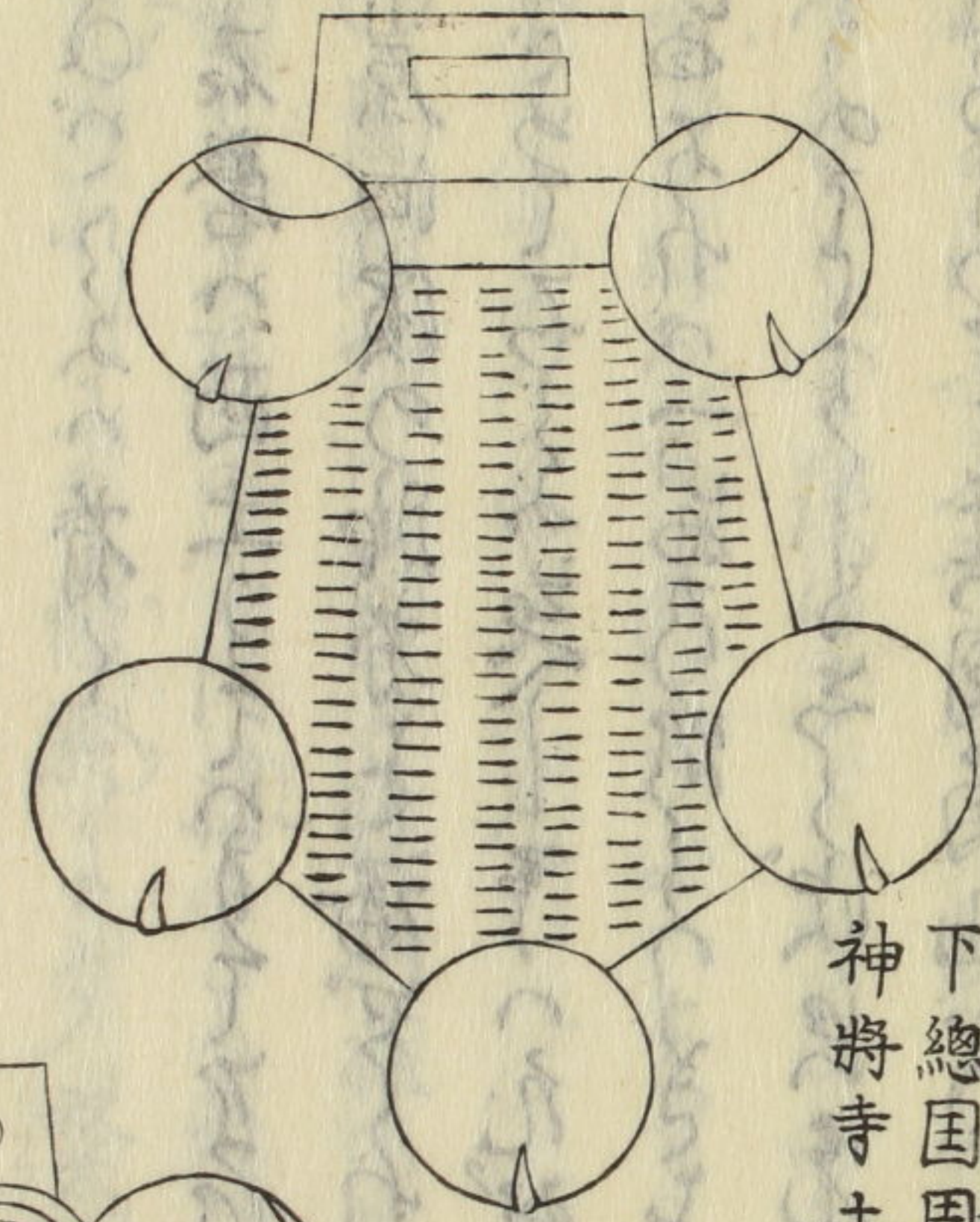
面之圖



背之圖

本表
本和
本出
本正

下總國行徳
善照寺所藏



下總國周集郡貞元村
神將寺土中所出
或作準和名抄作維
二字スエトヨマシム

日々直羊の飛ぶらし

「たゞしきつゝもつとみわめてはなすも
はたはつとくみわめてはなすも上の上の白りたつたの
ふたはつとくみわめてはなすも下の上の
別にあつたつとみわめてはなすもはつとくみわめてはなすも
何れもつとくみわめてはなすもはつとくみわめてはなすも

○橋經亮記の遠江の天龍河をてあつたつとくみわめてはなすも
ここ西行教を記にても龍乃梵語却可ともつとくみわめてはなすも
たつとくみわめてはなすもはつとくみわめてはなすもはつとくみわめてはなすも
の中つとくみわめてはなすもはつとくみわめてはなすも

○古事記神武天皇條に大熊襲出入即失つとくみわめてはなすも
つとくみわめてはなすもつとくみわめてはなすもつとくみわめてはなすも

の熊野縁紀なるも古事記なるも二行を記し中に
大熊襲出入と書し明かしくみわめてはなすも
百年中以前のもつとくみわめてはなすもはつとくみわめてはなすも
弁毫傳と書し

○名田の古田に一度は着林にゆくは田なるもつとくみわめてはなすも
○とくみわめてはなすもつとくみわめてはなすもつとくみわめてはなすも
つとくみわめてはなすもつとくみわめてはなすも

○本名をみわめてはなすもつとくみわめてはなすもつとくみわめてはなすも
はつとくみわめてはなすもつとくみわめてはなすもつとくみわめてはなすも
○行基愛帝傳に留青廣集とつとくみわめてはなすもつとくみわめてはなすも
つとくみわめてはなすもつとくみわめてはなすもつとくみわめてはなすも
つとくみわめてはなすもつとくみわめてはなすもつとくみわめてはなすも

○蠅蛉有子果羸負之... (transcription of handwritten text on page 13)
蠅蛉有子果羸負之... 他の中の子... 食料不
... 子の半の果羸... 雨淫の困ら
... 傳... 詩... 勲... 中... 方... 也...
... 佛... 經... 亡... 年... 人... 相... 色... 其... 言... の
... 寛... 永... 水... 其... 言... の
... 傳... 其... 言... の
... 永... 其... 言... の

慶にひりわたりて補ひてそめりひけりまに依
 たりたりそのもよふまをきくものにもあてて旧
 きものゝ漫滅利缺がらたふるあやふなるるが
 していふまにあらはらして人々のききよら
 清らふて邪いよとにば中_二宮_一易に邪うやど
 いふもよとてやめ_二舊_一の碑字たる人らあひたし
 次書にたりしものより考拙_二版_一程_二周_一造_二碑_一の_二後_一版
 後より與_二越_一人_二以_一為_二鬼_一楚_二人_一以_一為_二魍_一魃_二に
 くるくの事_二人_一に_二關_一係_二の_一事_二に_一ま_二た_一ま_二に_一入_二依
 大學親_二民_一の字程氏_二の_一新_二字_一の_二謬_一を_二た_一ら_二わ_一せ_二き_一
 既に湯_二盤_一の_二銘_一を_二た_一ら_二わ_一新_二字_一の_二誤_一の_二明_一然_二と
 うなるといふと王陽明_二の_一親_二民_一を_二字_一を_二た_一ら_二わ_一

うくうく_二一_一より_二終_一り_二曲_一説_二を_一と_二あ_一は_二わ_一ゆ_二あ_一ま_二と_一れ
 たりして朱陽のまは別_二と_一る_二衆_一臣_二起_一り_二を_一み_二
 ひつひつ_二其_一後_二に_一書_二の_一金_二滕_一の_二新_一字_二を_一て_二の_一親
 迎にたり_二幸_一乃_二傳_一説_二を_一た_二ら_一新_二親_一音_二に_一り_二て_一程
 氏_二の_一例を_二た_一ら_二わ_一て_二や_一程_二朱_一の_二説_一に_二文
 の_二徴_一も_二あ_一り_二て_一其_二後_一に_二は_一説_二一_一事_二也_一其_二の_一
 取_二程_一朱_二の_一説_二に_一極_二り_一い_二や_一に_二たり_一い_二み_一説_二一_一の_二古
 典_二文_一に_二新_一字_二を_一と_二新_一に_二依_一り_二い_一誤_二字_一を_二遠_一ら_二り_一い
 ゆ_二あ_一の_二科_一申_二又_一を_二漢_一楷_二を_一う_二つ_一い_二ひ_一て_二親_一迎_二を_一り
 新_二迎_一に_二た_一ら_二親_一民_二を_一は_二親_一民_二を_一た_二ら_一り_二て_一彼_二等_一
 十_二人_一の_二あ_一り_二て_一補_二せ_一し_二こ_一の_二誤_一に_二を_一ま_二と
 の_二あ_一り_二て_一い_二ひ_一て_二い_一み_二誤_一入_二ら_一る_二事_一を_二決_一して_二た_一

人活眼より活書を讀むべしといふの事
死眼より死書を讀むべしといふ事
死眼より死書を讀むべしといふ事
死眼より死書を讀むべしといふ事
死眼より死書を讀むべしといふ事
死眼より死書を讀むべしといふ事
死眼より死書を讀むべしといふ事
死眼より死書を讀むべしといふ事
死眼より死書を讀むべしといふ事
死眼より死書を讀むべしといふ事

○本方の古書と新訂の元本
と異なる事多し
古書に於ては
古書に於ては
古書に於ては
古書に於ては
古書に於ては
古書に於ては
古書に於ては
古書に於ては
古書に於ては
古書に於ては

一と云諸書の解校正の事
古書に於ては
古書に於ては
古書に於ては
古書に於ては
古書に於ては
古書に於ては
古書に於ては
古書に於ては
古書に於ては
古書に於ては

おのづからいかに氷尾半とてなむなれはほの曲を成
 びしらふげほをほくもほくもほくもほくもほくもほくも
 に長庚早の留入夕都並ぬと考ふる不問し
 ○白馬とてあやうゆゆりしれ誰もあはれもあはれ
 もりて白ふきの青くちゆもあはれにあはれ六
 女と人の首原詩依後編とてふ不問詔桃の即一桃
 ずわを詔梅といつても亦常の白ふ梅とて一花威
 大が詩に。不知行到詔梅遠。但見天風吹積雪。以
 ず証とてくしめ詔梅に對していつてさかり詔も青も
 相通とてくしめてあつては彼園の人の常乃ち白ふ梅
 を白梅とていつて詔梅のものとてあはれと考ふるや
 記する岡田梅是の鳥梅と對してはやくとて一鳥

梅は燒梅とて黒く醜梅の塩漬をわく塩と事
 へ白ふとては彼地の製とては塩を衣に煎く
 斗に強くせんもあはれとてあはれとてあはれとて
 ○頸瓶の中におにひらうらの原より曰六帖く
 いかつてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて
 といひあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて
 といひあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて
 らげあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて
 たぐあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて
 きいあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて
 といひあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて
 といひあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて
 といひあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて

やどりてゆくんきでの田舎へ備馬柴藩の一際た
 大臣推けたりしあひて美事おぼはのこしをわを
 彼集の違ひをいん用ゆらういづらう又同は成物
 須磨にゆきし中もそりたれぬ津ツキ好のきんて
 きたららういづらういづらういづらういづらう
 くれの皆ゆきしをいんていんていんていんていん
 中が私按美事美事の并に六帖の程をいづらう備馬柴
 もふのち所を考へば六帖のいづらうは成物も亦
 備馬柴のいんていんていんていんていんていん
 といふのいづらういづらういづらういづらういづらう
 し待たれ備れのそりたれ美事おぼはに備よあ
 るといふいんていんていんていんていんていん

下りしついでに神をいづらういづらういづらういづらう
 祝とすいづらういづらういづらういづらういづらう
 といふもあありアハハカ赤鯉をいづらういづらういづらう
 いづらういづらういづらういづらういづらういづらう
 の并にいづらういづらういづらういづらういづらう
 人多し取眼は信けしを固うれよ服とはあて突
 沖師の復たをうりせばはたきよはうわていんて
 の人取眼をいづらういづらういづらういづらういづらう
 子院にみあて候あつしと考へて聲ふのホユ乳
 ぶいづらういづらういづらういづらういづらういづらう

○古事本鑑字のいんていんていんていんていんていん
 人のまゝいづらういづらういづらういづらういづらう
 といふいづらういづらういづらういづらういづらう

人も海書ふとせられたる人まわををせしうあふ人
 乃もふり借るる其孫具教の徳書一紙くつり
 天正元年十二月也これゆいほもなう一佐長乃
 奸計にあつて命をうしなしたる家士にけりな
 いあしき路りにはうぐん唯辰親房々の命を光を
 失はつたところ共けういづき又雅のあし
 くらへ九伊海にけりる舊話たをうもにまうけ
 ましこのあて共すふ意のあつて一保たう
 揚く一書本のまうて流しあつてのりなを後
 つて久ぬぬりていふたあつて書かすいふれ
 きあふ元乃別荘に繪させたるふ安藤守清監
 物請の八徳乃社の作相も及び書かすいふ度會

延直り書く繪のうばしきうふに彼八徳乃東向
 なるに海とうるたあて書かす西首のあつて
 いうや難一けりふられ繪をいふていふ
 になんて繪圖のうらまをわたりあつた
 らたふに違へる例しとていふていふ
 かのうふあつていふていふていふていふ
 書りあつていふていふていふていふ
 田田えあつていふていふていふていふ
 十たあつていふていふていふていふ
 といふていふていふていふていふ
 のあつていふていふていふていふ
 にあつていふていふていふていふ

○前編に安覺良祐別人瓦同人瓦と録し
しを此より二條專念寺現任隆圓上人本朝高
僧傳中此師の傳と書しけり。其文云。釋良祐号安覺
一人をり。分明なり。其文云。釋良祐号安覺
一名色定。建仁榮西禪師弟也。甫七歲。歸釋
氏習業。良印學頭。剛記捷穎。種智夙發。讀書
五行。並下操觚。千言立成。未盈冠歲。博涉精
通。誦法華四功德之文。始志全藏書寫之願。
奔走四方。紙墨化人。一時緇白資助者多。學
力書造。次不歇。雖行程之間。必具筆硯。筑
之吉原觀音香椎箱崎。豐之彦山。淡之武島
等之地。遊歷踰遍。踰海在宋。餘十寒燠。暗記

一藏。不舍寸陰。還止筑前田島住。香正寺。初
素願之速成。日詣孔大寺。神胸帶經案。行步
揮筆。承元初年。終功一筆。凡經律論該計。其
部六百三十八。其卷二千七百四十五。其帙
二百五十八也。大宮司宗像氏國與祐雅好。
捨財建堂。度神祠。側祐自彫像。守護真典。鎮
西奔瞻香華。誓禮焉。以某年仲春。祐告徒曰。
望日吾行矣。至期持念誦安座念佛。諸徒困
繞。及日停午。瑞雲覆院。音樂聞天。祐忽曰。時
至矣。又手當胸。辭衆而逝。顏容如生。葬於高
天陵。歲七十三。臘。若干夏矣。贊初。鶴林玉
露のよき引。終ふ。わく。古今一人。よき。枝葉萬

その感美あり。衣高僧傳の着人少きがゆゑに本傳全くと其まゝに
くふまゝに譯せしむるに迎奉大典禪師安覺の筆の
解節經八五行をくく長樂建禪師といふ人乃
くふに跋を加へらるゝ又小雲稿稿にあり其中
くくハ文治三年丁未法師二十九首業華嚴
經至安貞二年戊子而大藏既已成矣中間
四十二年。中其跋華嚴經有曰。昔釋尊以三
七月。口之。今弟子以九十日筆之。說之。与書
雖異。開悟得脱是同。偉哉斯言。苟非菩薩乘
願輪以格焉。然如是。此跋くもまゝに考
くくあり。年紀をくくらるゝにらるゝうく又本傳

其年とまゝとを隱圓上人考て法師年法元己卯
崇仁寛喜三年卯二月十五日逝とまゝに賜く。他に
香月牛山著安覺辨。伊藤東涯の秉燭譚くも出。安
心推敲記といふものもくくらるゝ。高僧傳
の考くくらるゝ及ぼくく。此高僧傳ハ元禄十又壬午
第三月美濃加納盛徳禪寺師實といふ人の著くく
此傳と安羅門僧正の傳とに對する力と盡くく。其
其九例に如菩提仙那碑又安覺法師行狀。是搜索
之珍奇。若為辨續。則非好古之人矣。とくく。ん
はれは因に安羅門僧正の傳元亨釋書にふく
くく所釋くくたに獨く釋書くく釋書撰南天竺
安羅門種くくあり。支那五慧くく登り。時一

光祿に遇ひてす回を應じ又珠を拜せんとも
善しふ飛曰又珠ありて今日本に誕生せしむ
りて本邦に赴く天平八年七月行基は師奉りて
聖僧と追ふりてより禮部鴻臚雅樂三條と
しし勅依律に向しむるより高僧傳小奉るふ
の南都戒壇院新義學門僧正の碑銘のまゝなり
傳法弟子修業著そ平素隨仕し親しくするふ
一毫の違ひなきなり先その名字にさうなり
釋善提仙那南天竺人姓婆羅遲。歸雁門種
といひり天竺より十六國九十六種皆其徳風を
作り唐にありても緇素奔走せしむるを善く
五臺山にありて又珠師利を拜せんともその一條の

たゞ日本使丹波比廣成留学僧理鏡等唐にありて
芳譽をさしむる東飯せんとも要ら清く記し東
瑞の船中風浪甚きとき瑞仲一心入禪。須臾風
定波息。釋書にあり渡來の年紀の同く行
基相見。私言梵語往履欵密。宛如舊識の條又三條
を〜〜部迎せしむるも同く天平勝宮東大寺寔眼
信養の導師三年僧正に任ぜしむるも天平宮字
四年二月廿二日遷化も同く享年五十七期二月三日
舍維於登美山右僕射林那臨滅度。謂諸弟
子曰。吾常觀清性直嚴自性身。而猶尊重彌
陀。景仰觀音。汝曹拙吾帑藏衣物奉造阿彌
陀。淨刹。又云。吾生在世日。普為四恩造如意

同の事あり

十四

輪像欲更造八大菩薩像無常行迫其願不
請^{カナハ}直告相助畢功矣弟子等遵遺旨修飾八
像又刻肖像並置大士傍焉贊ハ前に奉るご
り一東大寺より雜策と捨圖^{ナニエツ}する中ふ得るうら
○親しき僧戒整本法のついでにきれた時人傳と著
せ一日ぬま和尚と傳^{モラ}するをわし其の業紀を
志し一返るる降し一其陸軍にぬらんをよめし
然れども平義孝のいふやうに流すもつらぬ目よ
はき理義につきあつた艱^ナらういづも甚道禱
人に穿^{ホッ}るのさうとあつた採^{ホッ}る人さうと筆^{ホッ}く折^{ホッ}く
安覚仙那の傳のいふと流すうふのいふとあつた
和尚名は善の妙なりといふに傳^{ホッ}るやとさうに傳^{ホッ}る

和田氏母天人懐入るるを破^{ホッ}る幼くもあつたと
あつたも又母愛し許^{ホッ}る十七歳にいつた山
端園花の寺雷^{ホッ}撃ふ投^{ホッ}く難^{ホッ}發^{ホッ}深^{ホッ}衣^{ホッ}をとりまよ
ふとあつた夕べ鏡に倦^{ホッ}るつらうに倦^{ホッ}るつらうに
心^{ホッ}懐^{ホッ}を忘れ機用現^{ホッ}前^{ホッ}を師^{ホッ}ふ母の印可^{ホッ}されが自
らあつた自由を得^{ホッ}るつらうに親^{ホッ}然^{ホッ}して四方に遊^{ホッ}
寛文四年遊^{ホッ}に坂本に庵とあつたといふにんを
八年に一友人其の乃まうとあつたといふあつた
あり是より志を養^{ホッ}く一洛東泉涌寺に往^{ホッ}る爲^{ホッ}經
を閱^{ホッ}る味^{ホッ}半^{ホッ}大^{ホッ}不^{ホッ}悔^{ホッ}の悟^{ホッ}りといふと有り自他と
兼^{ホッ}濟^{ホッ}んと誓^{ホッ}る園花の寺に住^{ホッ}る適^{ホッ}て戒^{ホッ}とあ
んとあつた其の一律師に違^{ホッ}ふ遇^{ホッ}りて疑^{ホッ}る所とあつた

のうらうらとくは止其人肉白衣と著とてんてん
 ようつそん復故本に帰家璽珞の羯磨コシノの作法コシノ
 二百五十戒也羯磨の作法と釋コシノも一に依自誓と受
 如字カツとも流義ふりり習ふまじ
 具一更に名符乃身にゆるもの一線とてんも身に
 後へト微塵とてんも候に入や誓入つよそ徒
 光雲庵のよに露オホとてんも南時のたての受戒皆
 論伽乃羯磨コシノの四十八戒戒にゆるりまじ
 に異あるなよ人多く織とてん即誓續詩を作と
 其獨見キヨクケンとてん山キヲ中其諸悪論者小乗の比丘
 大乘を混れとてんはのよ階とてんなにな本
 をりり山嶽撰律の同よ遊の後撰并宮盛亂法
 親王の精入態とてん小師に止る又法照在す

庵と信東岡詩を構とてんをてんてん同信信の
 化益息多く琉球の僧法と求りてまはる者私高に
 獨とて後時香と燃モヤ初故園にありて日本に
 して善知識に遇へ必此事と行ひてんて誓入に酬ウラふ
 といつてたよるよ元禄三年正月其母儀没と自
 後哀情肉に纏ヒキひ外若前とてん一階もまじはひよ
 疾よほとて七月之日に化き初日其徒にふとてん
 寧とてり回即心念佛一心之觀これ吾位處之也等
 みのひとてんに留りて且暮我に遇ん我死憂つる
 了たつれとて又暮夜法陀儀居るよ公堂念佛し終
 了云中道即法界とて即止觀とて即邪邪邪邪と
 何ぞ南无阿弥陀佛とてんれば則念佛の外に止觀

かく止究の介に念佛をし。熊所の情の取とるは
法界の智の照ととるや。侍者曰是のこれ。院院
の用をたりや。和尚曰吾の平生。院院の用をたりや。
此の遠近の徒。元に垂訓の徳。氣平育の。くし。歎み
十四。脈十八。門人。全身と。北白河。は。葬る。和尚。初め
禪と。学ひし。も。并中。三大部。と。し。も。及び。教。觀
久に。備ふる。事と。え。る。の。故。よ。ん。と。天。名。四。羽。の。學。に
潛の。宗と。更。り。し。も。の。衣。拂。と。雷。峰。に。還。り。し。も。年
四十。し。る。後。天。名。一。宗。乃。律。法。の。く。ら。や。四。百。五。十。年
く。わ。り。感。を。し。し。も。あ。り。原。方。々。當。ら。ふ。に。あ。り。て。山。家
の。正。統。し。る。所。以。と。識。り。し。和尚。の。力。を。り。し。も。和尚
元。來。性。強。記。一。復。法。華。と。悉。く。背。に。し。も。其。撰。述

せり。慶園頌章句解。十重俗詮。三子有門大義。
始終心要大義。心經畧解。野山卅集詩偈。維著。以。ん
行。る。も。も。嗣。靈。空。律。師。其。志。と。終。く。安。樂。律
院。を。創。建。し。法。流。盛。り。し。和尚。の。詩。其。生
涯。の。志。と。看。ふ。も。足。り。の。傳。中。に。記。し。し。も。く。く。ふ
ふ。も。初。若。人。生。經。常。悲。歲。序。徂。趨。庭。寧。俗。態。
入。寺。作。禪。徒。解。慕。馬。師。秀。行。飲。船。子。殊。忽。忘。
機。境。了。祇。與。杖。鞋。俱。說。話。自。茲。淡。威。儀。緣。底。
拘。要。同。雲。裏。鹿。期。等。霧。中。息。一。旦。蒙。朋。諫。多。
年。究。聖。謨。升。簾。鷲。峯。月。落。几。鶴。林。珠。初。識。箇。
時。菟。不。如。明。處。株。興。懷。禁。絲。革。發。誓。護。衣。盂。
方。入。宣。公。域。更。遊。智。者。郭。設。房。隣。北。嶺。披。帙。

對東湖。放眼彌昭余。文心益豁乎。六塵輕白
 雪。三觀熾紅爐。持号天將曉。課經日又晡。豈
 思遭讒害。俄去背招呼。野雨衫介倍。村燈錫
 影孤。每離位。慈母數病傍。頑夫當此澆。風盛
 未看信手。杖何時損。執受直得侍。金軀。又歌
 集一冊ありしう。いふとらふ。まをわ。いん。ゆ。ま。
 にゆよありしう。乃述懐經う。の。まを。と。述経ひ。其
 内其教示に。あづらふ。よの。や。一。擧。揚。こ。

無我無造無受者。善悪之業亦不亡のこ
 と。あ。り。や。も。た。の。れ。め。ら。り。わ。い。つ。わ。く。
 色。即。こ。の。色。即。空。の。義。と。い。ふ。ゆ。ま。あ。ひ。
 くら。あ。ら。ひ。の。こ。ま。ま。も。怖。畏。と。い。ふ。ゆ。ま。あ。ひ。

西方の　　

わつあふらのまうふは　　のまのこ　　

ひの華　　

ね桜　　

あ

百四の巻三
百六の関えありては、津とて興一とて、
づれとて是を、一何とて、
〜様より、く、は、
成一、一、
と説く、
とて、

○竹苞鶴氏、
第十六。寶徳元年閏十月三日。長照院竺華
末過竺華曰。吾翁大椿築紫人也。少年東遊。
就常州師學四書五經。始聞孟子講時。食不
定。執人求豆一斗。掛之。
亂耳如此者。凡五旬。後得聞易語。而益資用。
為之。西飯紫陽。求財於親族。得錢十五貫。因

持又東遊。遂得易學。云。曰。今時如此。困學
者不復多見也。困田云。困字ハ、
く、
筑紫一、
關東よりして、
に、
よ、
そ、
年々、
長、
一、
ま、

てはそつづきのあつて申したる意は人の世に比ぶ
 ○事と類するに平字のあつたりある事とある所
 ありて類と並べ奉るもたつて破之は四事不可
 久として春寒。杖奨。老健。君寵。此中三事は
 に事もさつづき君寵に比せし意と目由一
 三利といふ一十年之利種穀。十年之利種
 百年之利種徳。此三意の種徳みあはるべし
 ○菜は類張國史にさつづき後けるも言辨
 とく人入菜しておまへ梅尾ふ裁給ひしよりまわり
 され類張國史にさつづき人締之固ふりて今も
 とある人入菜と好む西土の菜と採制する人といひ
 岡田次平まきしと云

